
小さな冒険と真っ白な地図のかけら

十弥彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな冒険と真つ白な地図のかげら

【Nコード】

N8166B

【作者名】

十弥彦

【あらすじ】

「暇なら、地下水道の探検に行こう！」海の近くにある大きくも小さくもない街に住む技術者の卵の少年・ファルが唐突に提案した。それが小さな冒険の始まりか？何かと騒動に好かれる親友を放っておけない料理人の卵の幼馴染ラズとともに街中を走り回るほのぼのファンタジー

第一話・「はじめのいっぽ」(前書き)

初めまして。十弥彦と言います。ちょっと大きな舞台の、子供達の小さな冒険をかければと思っていますので、お付き合い頂ければうれしいです。

第一話・「はじめのいつば」

本文をお読みいただく前に。

この物語は<http://chizunokakera.hp.infoseek.co.jp/index.htm>に移転しました。今後は上記URLで継続されますので、よろしければお越しく下さい。

見上げた空は何処までも青く澄み、海からの風も清々しい初夏の日の昼前。

町は道行く人々にぎわい、其処^{そこかしこ}彼処で子供達が遊ぶ。

大通りから少し離れた高台の住宅街でも例外ではなく、井戸端会議に興じる主婦達の声や、子供達の笑い声が建物の中にも耳に入ってくる。

そんなありふれた街の一角にある「海猫亭」という看板のかけられた喫茶店の二階の一部屋。

僅かに開かれたカーテンの隙間から、空の天辺に掛かろうとしている太陽の光が差し込み、作りかけらしい何かの機械の傍^{かたわ}らで丸くな

って気持ち良さそうに眠る小柄な少年の柔らかな頬を照らす。

そんな、平和という表現そのもののような室内に、誰かが軽く扉を叩く音が響いた。

「いい加減起きろよ、ファル。そろそろ昼になるぞ」

声変わり前の少年の声が、扉の向こうからかけられるが、ファルと呼ばれた部屋の主の少年は身動き^{みじろ}ひとつしない。

そんな室内の様子をうかがうように数秒の間を置くと、今度はかなり強めに扉を叩きながら声を張り上げる。

しかし、帰ってくるのは矢張り沈黙のみという結果に、扉の向こう側の少年が大きく溜め息をついた。

ついでに一言二言悪態をつくつと、

「ファル、入るぞ」

短く言葉をかけて部屋に入ってきて、中の様子に呆れたように顔を抑えた。

「返事がないから、どうせそんなことだろうとは思ってたけどな」矢張りな、と呟きながら、部屋の、より正確には部屋の中央で丸まっている主を見て、もう一度大きく溜め息をつく。

部屋の中央に置かれた機械や工具と言い、その周囲に散らばった設計図らしい紙と言い、どう見ても「夜遅くまで作業していたが、途中で眠気に負けてそのまま眠ってしまった」という光景そのものである。

「まったく、夜中まで明かりが点いていた次の日は、決まってこれだもんなあ」

少しは起こしに来る人間の手間も考えろよな、などとお決まりの文句をもらしながら、いまだ起きる気配のまったくないファルの所まで歩み寄ってしゃがみこんだ。

「こら、ファル。起きろってば。起きないと、飯抜きにされるぞ」

二度、三度、かなり乱暴な動作で肩を揺すって声をかけると、ファルが小さく唸ってさらに丸くなる。

それを繰り返すこと数度、ようやくにして観念したのか渋々と身体を起こすファル。

ぼんやりとした、如何にも眠たそうな琥珀色の瞳で目の前にいる相棒の顔を眺める。

「おはよう、ラズ。もう朝？」

「もうそろそろ昼だよ。それよりファル、お前、夜更かしするなどは言わないけどな、寝るならちゃんとベッドに入って寝ろよな」

仕切りと目をこすりながら挨拶をよこしてくるファルにここに来る前に渡された冷たい濡れタオルを手渡ししながら早速説教をするラズだが、返ってきた「次からは気をつけるよ」、という言葉にがっかりと肩を落とした。

「あのなファル、その返事これで何回目だ？　まったく、本当になおら

ないよな、その癖は」

「自分でもわかってはいるんだけどね、油断をすると、つい」

反省はしているんだけどさ、と濡れタオルで顔を拭きながら苦笑を浮かべる相棒に、ほとんど諦めた様な表情で手を振って応えようと、床に腰を降ろし製作途中の装置をしげしげと眺める。

「で、昨日は遅くまで掛かって何を作ってたんだ？」

全体的に丸めの、なにやら長いホースのついたその物体に、水場でよく見かけるものを連想するラズ。

「ポンプか？」 思いついた品名をそのまま口にするラズに、「半分正解」と、ファルが着替えながら軽く頷いた。

「正確には、蒸気式自動散水機じょうきしきどうさんすいきって言うんだけどね」

袖を折り返しながら続けるその言葉に、ラズが首を傾げてその「蒸気式自動散水機」とやらを小突いた。

「えーっと、散水ってことは、つまりは自動水撒き機ってことか」

先程から引き続いての身も蓋もない解釈の仕方に、しかし、

「一言で言えばね。でも、使い方によつては色々と便利だと思うよ？」

気にした様子もなくあつさり肯定すると、満面の笑みを浮かべて胸を張った。

「ま、完成したら、の話だけどさ」

「なんだ、これで完成ってわけじゃないのか」

「うん。これは一応仮組みしただけだからさ、まだ細かい調整とかはしてないんだよ」

試験稼動の時には声をかけてやるよ、とにこやかに言う相棒に対し、

「ああ」と笑顔で応じるラズ。

新開発された装置の常として失敗暴走の可能性もあるはずだが、そんなことを気にした様子は双方とも欠片もない。それが互いへの信頼からくるものか、ただ単に慣れの問題なのか判断に困るところではあるが。

「あ、それよりさラズ。今日暇か？」

散らばった設計図は部品、工具を片付けながら話題を変えるファル。
「ん？今日か？そうだな、暇と言えば暇だけど、お前の話次第では急用ができるかもな」

言外にろくでもない内容だった場合は相手にしないぞとはつきり漂わせるが、当のファルはと言うと気にした様子もなく、にっといたずら小僧の笑みを浮かべた。

「暇だったらさ、一緒に地下水道の探検に行こうよ」

なんでもないように軽く誘いかけてくる幼馴染に、ラズは思わず目眩を感じて眉間を抑えて頭を振る。

「ファル、お前なあ」

「ん？」

「お前、それ本気で言ってるのか？」

「本気でつて、こんなこと冗談で言つてどうするんだよ」

何やら随分と疲れているらしい親友の肩を叩きながら、変な奴だなあと呟く。

冗談のほうがどんなに気が楽か、とラズの言。何でこう、次から次にとこいつは、と今まであった「冗談より性質の悪い本気」を思い返ししながら顔を上げる。

「あのなら、ファル。二日間も森で行方不明になったのはついこの前だろ？それから一週間くらいしかたつてないのにまた同じ事したら、リー姉達にどれだけ大目玉食らうと思う？」

今の所、一番記憶に新しい騒動を例に出して説得を試みるが、大丈夫、と何を根拠にしているのか不明な自信と明るさで断言されてしまった。

予想された答ではある、が、だからといって疲労が軽減されるわけではない。

「毎度のことだけど、その自信の根拠は何処にあるんだよ、いったい」

「内緒」

あっさりとはぐらかされて、「おい」と引きつった笑みで睨み付け

てみるが、効果はまるでなし。

「全部が一辺にわかったって面白くないだろ？そのときまで、楽しみに待ってなよ」

独自の論法でそうラズを諭すと、棚から取り出した縄梯子なわばしを軽い掛け声とともに窓から放り投げる。

「おい、待てこら」

手際良くロープの端を机とベッドの足に結びつけるファルに、ラズが再び眉をしかめた。

「今度は何？」

首を傾げる仕種に、「それはこっちの台詞だ」と唸る。

「それ、なんだ？」

「見ての通り、縄梯子だけど？」

どう見てもほかの物には見えないよな？と反対側に頭を倒す幼馴染に、論点が違うだろうと返すラズ。

「俺が訊きたいのは、何でそんな物があるのかってことだ」

「何だ、そんなことか」

何でもないように笑顔を浮かべたファル曰く、三日程前の学校帰りに途中の雑貨屋で安く売り出していたらしい。

「ほら、あの時はラズも他のみんなも用事でおれ一人だったから、だから、丁度良いやつて」

皆がいたら、また叱られてたしな、と胸を張る相棒に本格的に目眩を感じるラズ。

そんなラズを尻目に、「とりあえず、今日は入り口の下見だな」と元氣よく宣言するファル。

「ほら、ラズ。早く行くぞ」

「待て、ファル。頼むからたまには大人しくしてくれ！」

「聞こえない！」

半ば本気でわめく親友の台詞を、節をつけた言葉でやり過ごす、さっさと縄梯子に手をかけており始めた。

第二話・「迷子と友人と」

港に程近い場所にある官庁通りの、その外れにある噴水公園。

街の名物であり、住人達の憩いの場でもある公園の大小様式様々な噴水の周りでは、陽気に誘われて出てきた住人達がそれぞれ好きな方法で各自の時間を過ごしていた。

そんな人達に混ざるようにファルとラズが中央の大噴水の縁に腰を下ろして、見るとはなしに周囲を眺めていた。

「それで」

ぼーっとしているのにも飽きがきたのか、隣に座る相棒に向かってラズが話しかける。

「わざわざ噴水公園に来て、一体何の用があるんだ？」

結局、何かと騒動に好かれる性質である相棒を放って置くこともできず、地下水道の入り口を下見するというファルと共に行動しているわけであるが、着いた場所は街の各所にある入り口のどれからも離れた場所にあるこの公園であった。

ラズの脳裏に、この状況を言い表すに最も相応しいであろう単語が浮かび上がってくる。

これまでの経験から言ってもほぼ間違いないだろうなと確信しながらも、それでも一応何かの用があるのかもしれないと、一番高い可能性を敢えて無視して問い掛けたが、返ってきた返事はどういうと、「さあ？」と言うなんと頼りない言葉。

あまりにも予測通りのその返答に急に精神的疲労を感じて、がくりと肩を落として頭を抱えるラズ。

「ファルお前な、さあってなんだよ、さあって」

「いや、何でもここに着いたのか、おれにも不思議なんだけどね。本当は町外れの入り口に向かった筈なんだけどな」

おかしいな、と腕を組んで首を傾げるファルの横で、ラズがぴくりと眉を跳ね上がらせると、ゆっくりと立ち上がってファルと向き

合った。

「つまり、迷ったって事か？」

「違うよ。ただのちょっとした勘違いだ」

につこりと威圧混じりの笑みを浮かべて上から見下ろしながら問う親友に、ファルがよくわからない論理で訂正しつつ暢気に答える。それを聞いていたのか聞いていなかったのか、「ほう」と相槌を打ちつつ笑みを深くするラズ。

そのままの表情でゆっくり深呼吸をすると、両手でファルの頭を掴んだ。

「この、人騒がせ小僧っ。それは迷子になったってことだろうが、完全に。そもそも、どうやったら地元で迷子になれるんだ、お前はっ」

「い、いたたたっ。ら、ラズ、痛いってっ」

頭を抑えたまま両手を握りこぶしの形に変えると、笑いながら怒ると言う器用な表情を浮かべながら、ラズが両の拳を相棒の頭に思い切り押し付けた。

「だから、痛いってっ」

「やかましい。痛いのが嫌なら少しは自分の方向音痴に自覚を持てぐりぐりと容赦なく拳に力を込めながら説教をされ、痛みに負けたファルがこくこくと頷くと、ようやくにして解放された。

「うゝ、痛かった。少し位手加減してくれたって良いじゃないか」

「自業自得だ。それにたまには痛い目にあわないと懲りないだろうが、お前は」

上目遣いに相棒に文句を言うファルだが、言われたほうは鼻で笑って受け流すだけで、気にした様子など欠片もない。

そんな余裕たっぷりな相棒の態度にムツときたのか何やら嫌な予感があったのか結局は何も言わないまま口を閉じた。

勿論、ラズがそれを見逃すはずがなく、文句があるなら言ってみるとからかい混じりに促すが、なんでもないとそっぽを向くファル。そのまま腹の中でぶつぶつと文句を並べ立てていたが、不意に「

あれ？」と小さく声を上げた。

「どうした？」

小さな呟きを聞きとめた相棒に、ファルがうんと曖昧に頷きながら応じる。

「向こうにいるのってさ、ウイスとセリエだよな？」

ほらあれ、とファルが指さす先には、言葉通り二人にとっては慣れた少年と少女の姿。

「意外な場所で意外な組み合わせだな。こんな所で何をしてるんだ？ あいつら」

首を傾げ、言葉の通り意外そうな表情で呟くラズ。

ファルとラズの家は一般住宅区、彼等の家は上流住宅区と言う違いはあるが、どちらも家は住宅街にある。この噴水公園とは少し場所が離れていることもあり、どちらかと言うとこの公園周辺は普段の行動範囲には含まれていないのだが。

「まあ、ファルじゃあるまいし、迷子って事はないだろうけどな」

「煩いな、迷子じゃなくてちょっとした勘違いだって言ってるだろう」

意地の悪い笑顔を浮かべながらからかってくる相棒を琥珀色の瞳で軽く睨むと、視線を転じて友人達の名前を呼びながら大きく手を振る。

その声にファルたちのほうを向く少女と、一瞬だけ此方を見てすぐ背中を向ける少年。

「おい、あいつ此方見てすぐ背中を向けたぞ」

「うん、見た。間違いなくウイスだね」

呆れた様に軽く肩を竦める親友とは対照的に、明るく笑いながら大きく頷くファル。

友人の素っ気無さなどいつもの事なので、ファルは欠片も気にしてはいない。むしろ、ウイスが自分に愛想が良かったりする方が、かなり本気で体調などを心配するだろう。

傍らで見ていると、無愛想なウイスに物怖じしないファルが一方

的に懐いている様に見えるが、実際はそう仲が悪いわけでもない。
「まあ、ある意味わかりづらいようでもわかり易いやつらだよな」

何かとつるむ事の多いラズが、頬を掻きながら呟く。

まあ、類は友を呼ぶって昔からよく言うしなあ、と自分の事は棚に上げてそう結論付けると、一足先に友人達の方へと向かったファルを追ってラズも走り出した。

「奇遇ね、二人とも。こんな所でどうかしたの？」

「うん、ちよつとね。そう言うセリエたちこそ珍しい組み合わせだね。あ、もしかしてデートとか言うのか？」

ラズと共に友人達のもとに駆け寄ると、相手の問いかけに答えが
てら、丸い大きな目でセリエとウイスの二人を等分に見ながらそう
訪ねた。

疑問に対して素直と言うファルの性質は基本的に長所であるが、
同時に場合によっては短所になる事もある。例えば、今この時の様
に。

ファルとしては別にからかうつもりではなく、単に周囲の会話や
ら物語やらによく出てくると類似した状況からそう連想しただけ
であるが、言われた方はそうは取らなかつたらしく、口に出したと
たんセリエに思い切り耳を引っ張られた。

「誰と誰が、何ですって？」

「いつ、いだだだっ。セリエ、みみつみみつ」

再度の痛みに両手をばたつかせて講義するも、加害者はまるつき
り知らん顔。

「おばかなことを言わないでもらえるかしら、ファル。どうして私
がウイスなんかとデートしなければいけないのよ。偶然よくうぜん」
「何だ、違うのか？」

意外そうに首を傾げたのは、助け舟を出す様子のまったくくないラ
ズ。

「当たり前だ。僕にだって相手を選ぶ権利位はある」

如何にも迷惑そうな表情でウイスが応える。

然程大きな声ではなかったが、

「それはどう言う意味かしら、ウイス？」

しっかりと聞き取ったセリエがファルの耳を離してウイスを睨みつける。

「どうもこうも言葉通りの意味だ。そんな事より、ラズ達こそこんな場所に何の用だ？」

「それはおれじゃなくてそいつに聞いてくれ」

セリエの非難を軽くあしらいながら改めて問うてくるウイスに、ラズが大きく溜息を吐きながら「そいつ」を指さす。

その言葉通りに耳を押さえて屈み込む原因に視線を向けると、なるほどと呟いた。

「迷子か」

「また迷ったの？ 懲りないわね、本当」

「あのね、二人とも、おれはまだ何も言っていないんだけど？」

まだ一言も説明しない内から迷子と決め付けられて、さすがにむつときたのか顔を上げて友人二人を睨みつけるが、元より迫力が微塵もない上に付き合いも長い相手ときては通じるはずもなく、

「お前の方向音痴に今更説明なんて要らないだろう」
だの、

「ファルが何処かで道を間違えるのなんて、何時もの事でしよう」
だのと好き放題言われて一蹴されて終わった。

それだけでも拗ねるには十分だが、それに加えて傍らで相棒がうんうんと頷く様に、ファルが更に頬を膨らませて不貞腐れるが、それは申し合わせたかの様に綺麗さっぱりと無視する三人。

「それでファル。本当は何処に行きたかったの？」

「町外れの地下水道の入り口」

拗ねる少年の機嫌など髪の先程も気に掛ける様子もない少女に、これ以上拗ねても仕方ないと持ったか正直に応えるファル。

「それはまた、随分と離れているな」

「だろう。方向も全然違うしな」

呆れ気味に肩を竦めるウイスに、ラズが大きく溜息を吐きながら言葉を返す。

人の苦勞も知らず、と毎度の愚痴が後に続くが、当の本人はと言うと開き直ったのか小さく舌を出して聞こえない振りを決め込む。

でもまあ、ファルだしなあ、とはウイスの台詞。

「それで、地下水道になんかに何の用があるんだ？」

「んーっと」

淡々とした口調の問いに、ファルが間延びした声を上げて視線を泳がせる。

「秘密って言ったら怒る？」

逆に問い返してみたところ、意表を突かれたのか、三人が互いの顔を見合わせた。

「私は別に構わないけどね」

「僕もだな」

セリエとウイスが即答。

すっ、と腕を上げてラズを指さすと、

「わざわざ聞かなくても、ラズが聞き出してくれるから」

そう同時に言い放った。

「お前等なあ」

指し示されたほうは、眉間を抑えて疲れた様に息を吐く。

「何でおれに振るんだよ」

「だって気になるでしょう？」

につこりと笑みを向けてくるセリエの言葉に、だからってなあとなら論しかけるが、立ち上がったファルに肩を叩かれて向き直る。

「ラズ、聞きたいか？」

頭半分高い場所にある相棒の顔を見上げて、かくつと首を傾げる。「気にならないと言ったら、嘘になるな。取り敢えず、探検したい」としか聞いてないし」

最もなその言葉に、ファルも確かにと頷くが、すぐに、でもなあ

と眉を寄せて思案する。

「何？ そんなに秘密にしておきたいの？」

「違うよ？」

呆れたように問うセリエに、そうじゃなくてとファルが苦笑を返す。

「単におれも少ししかわからないだけだよ。地下道に何か曰くがあるって人に聞いただけだし」

だから説明できることなんて少ししかないけれど、それでも良いかな？ と首を反対側に倒しながら続ける親友に、ラズがひらひらと手を振って、「なら聞かなくても良い」と応えた。

「今聞かなくてもその内わかる事なんだろう？」

「多分ね。確実にとは言えない」

「それで充分だ」

「そつか、じゃあウイスとセリエにだけ教えておけば良いのかな？」

ラズの出した結論にファルが腕を組んで頷きながら呟いた途端、後頭部に衝撃が走った。二度、連続して。

殴られた所を抑えながら振り向いた先には、素知らぬ様子で佇む加害者二人。

「あのさ」

「お前が人の話を聞いていないからだ」

取り敢えず仏頂面を作って文句を言おうとするが、一呼吸早くウイスに先を越されてしまった。

機先を制されて、うつと鼻白む。

「おれ、何か聞き逃した？」

もしそうならごめん、と肩を落とすファルに、

「別に謝らなくても良いけどな、僕もセリエも無理して聞かなくても構わないと言っただろう。それ位は覚えておけ」

ウイスが呆れ気味にそう言葉を繋げる。

確かに二人とも無理に聞かなくても構わないと言っていたが、それは自分で聞かなくともラズが聞き出すからであつた筈だ。だがそ

のラズもその内わかるならそれで良いと言っている以上、先程と今とでは言葉に矛盾が生じる。

「さつきと言ってる事が違うと思うんだけど」

「そうかしら？」

ウイスを指差してセリエに矛盾点を問うてみるが、返ってきたのは笑顔を短い言葉のみ。

怪訝そうに眉を寄せたファルが何か言いたげに口を開きかけるが、結局は何も言うことなく口を閉ざした。

少しの間黙って思考を巡らすと、にやりと悪戯小僧の笑みを浮かべて大きく頷いた。

「そっか、その内にわかることなら、先に言わなくても大丈夫だよな。一緒なんだし」

「それ位すぐに気づけよ、まったく」

うんうんと納得して呟く少年の頭を、相棒が軽く小突きながらぼやく。それに対して顔を上げて頬を膨らませるファル。

「だって、三人とも分かり難いんだもんなあ」

「おれ達が分かり難いんじゃないくて、お前が鈍いだけだ」

腰に手を当てて溜め息を吐くラズと、彼に同意するように苦笑を浮かべるウイスとセリエの二人。

自分ではそうは思わないんだけどなと首を捻れば、もう少しは自覚しろと返ってくる。はつきり言って埒が明かない。他の二人もそう思ったのか、顔を見合わせて大きく頭を振ると、飽きる事無く水掛問答を繰り返すファルとラズの間に割り込む。

「ラズ、説教はまた今度にしろ。このままじゃ話が前に進まない」

「ファルもいい加減にしなさい。地下水道の入り口に行くなら行くで行動に移さないと、時間がなくなるでしょ」

友人二人に諭されてバツが悪そうにそっぽを向くラズと、そうだったと小さく舌を出して呟くファル。何かと手の掛かる連中に、セリエとウイスが呆れ滲ませて息を吐く。

意外な所で似た者同士なこの幼馴染二人組みに付き合うには、体

力と気力が要求される。その他にも迫力や行動力その他様々があるが、やはり一番必要になるのは、先の二つだろう。

「ともかくさ、話もまとまったことだし、次の行動に移ろうよ」

暢気なファルの言葉に、一瞬誰が原因だと口に出しそうになるが、それをぐつとこらえる三人。

「一応言っておくけどな、今度はさっきみたいに余計な考え事をしていらない路地に入るなよな」

「大丈夫だよ」

ラズの念押しに、説得力に欠ける言葉をファルが自信に満ちた笑顔で言つてのけると、今ひとつ信用していない表情の三人を促して歩き始めた。

第二話・「迷子と友人と」（後書き）

お久しぶりです、十弥彦です。一話目からかなり間が開いてしまいました。ようやく二話目を更新です。

次回はもう少し早めに更新できるようにがんばります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8166b/>

小さな冒険と真っ白な地図のかけら

2010年10月9日22時58分発行